

---

令和5年度 第1回午後（2科目）

桐蔭学園 中等教育学校 学力検査問題

国 語

令和5年2月1日 施行

---

注意事項

1. 試験開始の合図<sup>あいず</sup>があるまで、この冊子<sup>きつし</sup>の中を見てはいけません。
2. 机の上には、えんぴつ・シャープペンシル・消しゴム・受験票・座席券・時計以外のものを置いてはいけません。受験生<sup>あ</sup>どうしの貸し借り<sup>か</sup>もできません。また、机の中には何も入れてはいけません。
3. スマートフォンは、必ず電源を切って、かばんの中に入れておいてください。
4. 問題冊子<sup>もんたいさふ</sup>の印刷<sup>いんさつ</sup>が見えづらかったり、ページが不足したりしている場合、また、えんぴつなどを落としたり、体の調子が悪くなったりした時は、だまって手をあげてください。
5. 問題冊子のあいているところは自由に利用してかまいませんが、どのページも切りはなしてはいけません。
6. 記述問題において、小学校で習わない漢字はひらがなで書いてもかまいません。
7. 問題は18ページまであります。
8. 問題冊子は持ち帰ってください。

□ 次の一線部のカタカナを漢字に直し、漢字はその読みをひらがなで答えなさい。

- ① マラソンで日本選手が世界新記録をジュリツした。
- ② 国語の授業参観で詩のロウドクをする。
- ③ ボクジョウでおいしいアイスクリームを食べた。
- ④ 地球温暖化の影響でさんまのフリヨウが続いている。
- ⑤ 算数の授業でスイチヨクの線を引いた。
- ⑥ 黒い絵の具と白い絵の具でハイイロを作る。
- ⑦ 朝早く起きてウミヅいの遊歩道を散歩する。
- ⑧ シユクシヤク二万五千分の一の地図。
- ⑨ 剣道で二刀流の元祖を名乗る。
- ⑩ 今年の秋は穀物がたくさん実った。

□ 次の文章を読んで、後の設問に答えなさい。

本当の学びというのは、学校の授業や受験勉強などに限定されるものではありません。その意味で、人間の一生は、学びの連続であると言っていていくらいです。何歳なんさいでも学ぶことができ、常に学びがあるからこそ、生きていて面白おもしろいと思えるのです。

「発達」という言葉を、よく表面的な理解で「できないことができるようになること」ととらえることがあります。けれども、人間は年を取ると、できないことも増えていきますよね。たとえば、記憶きおくが曖昧あいまいになったり、運動機能が落ちていたり。<sup>①</sup>先ほどのような発達のとらえ方をしたら、年を取ると後退していくから、発達は若いころに限定されたもの、ということになってしまいます。

学んだことによって、自分の中にある世界がさらに深まっていくとか、やってきたことの意味がまた違ちがった角度でわかってくるのかいうことは、何歳になっても起こります。そうやって、体や心が成長、進化していくことが本当の発達であって、発達は死ぬまで続くのです。

だから、別の見方をするならば、学びというのは、人間の発達をいろいろな角度で促うながす行為こういである、というふうにも言えます。

中学生や高校生のころの学びというと、学校や受験の勉強に結びつけて考えがちなのだけでも、それらを取っ払はらったもつと深いところにあるのが、本来の学びであり、人生を耕すために学ぶということでもあります。だから、仮に<sup>②</sup>、中高生のときに十分に学ばなかったとしても、それで一生がダメになってしまうということは、原則ないのです。

何歳になったとしても、自分はまだ未熟だし、知らないことだらけだから、もつともつと学んでみたい。もつと自分の世界を豊かにしてみたい、と思う姿勢さえあれば、学びは続いていくのです。そのことを、ぜひ若いうちに知っていてほしいのです。

「学び」には、三つの段階があると言われています。

最初の段階は、いろいろな知識に触れて、物の仕組みや歴史など、何かを知ること。これを「端緒知」と呼びます。

次に、端緒知をきっかけにして、それがなぜ起こったのだろうか、どうしてこういう現象が起こるのだろうか、などと自分なりの疑問や課題を持って、いろいろと調べたり、人とディスカッションしたり、記録して分析したりして、知識を深めていくことを、「実践知」と呼びます。「深め知」と言ってもいいでしょう。

たとえば、第1章で、源頼朝が鎌倉に幕府を立ち上げたけれども、どうして朝廷のあった京都から遠く離れたところに幕府を開いたのだろうか、という話をしましたね。この例で言うと、頼朝が鎌倉に幕府を立ち上げたという事実を知ることが「端緒知」で、どうして鎌倉だったのだろうかと疑問に思っ調べてたり、考えたりしていくことが「実践知」ということになります。

そして、それらがわかったことで「歴史には興味がなかったけれど、なんだか歴史って面白そうだな」と歴史に対する見方が変わったなど、その人の人格形成になんらかの影響を与えるような学びに発展していく。それを「人格知」と呼びます。

このように、本当の学びというのは、③「端緒知」「実践知」「人格知」と三層になって深まっています。

僕は実際、どうして京都から遠く離れたところに幕府をつくったのだろうかと思っ、東京に出てきたときに、鎌倉へ行って見たことがあります。そこは切り通しになっていて、確かに攻め込みにくい場所でした。頼朝が攻め込みにくいところに幕府の拠点をつくったというのはよくわかるのだけれども、朝廷を守るためじゃないな。だったら、幕府というのはいったい何なのか。幕府ができるということは、何を意味するのか。そんなことを考え、ずっと疑問に思ってきました。僕らが学生のときには、こういうことをちよつと調べようと思っても、本格的な歴史の本を買わないと調べられません。でも今は、インターネットである程度のことわかって、さらに調べたいとなったら専門書を読もうというように、いろいろな選択肢があります。その点ではとても便利な時代になったと思っます。

それを生かして、学校で教えてくれることの中には、必ず「なんで？」という問いが隠れているはずだ、というふう考

えてみる、疑ってみる、調べてみる。学校で同じことを習ったとしても、単なる知識で終わってしまうのか、人生を変えてくれるような深い学びとなるか、学ぶ側の意識次第で、それはまったく違ったものになると思うのです。

(注1) 前項の「学びの三段階」について、もう少し、別の例で言い換えてみましょう。

やったこと、経験したこと、学習したことなどで、何らかのスキルが身についたとか、新しい知識を覚えた、ということがありますね。たとえば、スマホにはこんな便利な機能があつたんだというのを知った、というのも新しいスキルです。

そして、それを使ったら、生活が便利になったとか、今までとは違った人とコミュニケーションが取れるようになったとか、実践的なレベルで生活行為が広がっていく、というのが二つ目の学びです。そして、④結局学んだことで、自分の生活そのものが変わっていく、というのが三つ目の学びになります。

SNSを始めたら、いろんな国に仲間ができて、その友だちを訪ねて実際にその国に行ってみたとか、あるいは、その国が抱えている国際問題を知ることになって自分の進路を見直したとか、皆さんの身近なところにも、そういう事例はたくさんあるはずです。

こんなことを話している僕だって、皆さんと同じです。

たとえば、農業について、今までは表面的なことしか理解していませんでした。ところが最近、さまざまな農業のプロと接する機会に恵まれて、これまでの認識がガラッと変わりました。

野原というのは、肥料も何もあげないのに、毎年豊かに草が茂りますよね。つまり、本来あるべきところであれば、肥料なんかなくても、植物は自分で上手に育っていける力を持っている、というのです。

それは、こんな仕組みだそうです。生えていた草が枯れると、土の中にあつた根の部分に空洞ができます。そこが水や空気の通り道になって、たくさんのお生物が棲みつくようになります。すると、どんどん土が柔らかくなって、微生物が豊かに生息する土になっていく。すると養分をたっぷり含んだいい土ができ、周りの植物は元気に育っていきます。

ところがそれを下手に耕してしまうと、せっかくできた根つこの空洞が潰されてしまい、自然の力でできた循環が断ち切

られてしまう。微生物の生態系も壊こわされてしまう。だから本来、農業は耕さないほうがいい、というのです。その方法は、自然農というふうと呼ばれています。

一方で、(注2) 現行の農業のように同じものを一斉いっせいにつくろうとすると、同じ栄養分が地中から失われてしまうので、肥料で栄養分を補わないといけなくなる。それは、薬に頼たよって生きている人間と同じようなもので、そうなると作物も弱ってきます。そのままでは作物は虫にやられてしまうから、今度は農薬をたくさんまかないといけなくなる。同じものを一斉につくることは、一見、効率がいいように思っけれども、本来はなくてもいい肥料や農薬を使わなくてはいけなくなつて、土の生命力を弱めてしまう、ということなんだそうです。

それを聞いて、僕はなるほどと思つて、自分でもいろいろな作物を育ててみようとか、お店で買うときにも<sup>⑤</sup> そういう考え方で育てた作物を選ぶようにしよう、ということふうに行動が変化してきました。

私もこの年になって、ようやくそういうことに気づいたわけです。今まで学んできたことや経験してきたことがつながつて、より深く新しい学びになる。そこで味わう感動が大きければ大きいほど、自分の考えや行動への影響も大きくなります。つまり、今まで学んできたことや経験してきたことは、すべて無駄むだではないということ。そして、いくつになつても学びはあるということです。

「端緒知」「実践知」「人格知」というふうに、考える、実践する、交わるなどを含んで、「学ぶ」ということをイメージしていつてほしい。そういう目で見れば、<sup>⑥</sup> つまらないと感じていた学校の授業も、違った見え方がするかもしれませぬ。

(汐見稔幸『人生を豊かにする学び方』より)

(注1) 前項Ⅱ「前の部分で述べた」ということ

(注2) 現行Ⅱ「現行行われている」という意味

問1 ——線部①「先ほどのような発達のとらえ方」とありますが、これはどのようなとらえ方を指していますか。次の【 】に合うように本文中から十字以上十五字以内でぬき出して答えなさい。

【 】というとらえ方。

問2 ——線部②「仮に、中高生のときに十分に学ばなかったとしても、それで一生がダメになってしまうということは、原則ないのです」とありますが、なぜこのように言えるのですか。その理由の説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア. 中学生や高校生のころの学びというと、学校や受験の勉強に結びつけて考えがちだが、大人になってから学ぶことのほうが深い意味があるものだから。

イ. 中学生や高校生のころの学びには、自分を進化、成長させる要素が欠けているが、それは大人になってからの本当の学びにより補うことができるものだから。

ウ. 本来の学びとは、体や心が成長、進化していくという人間の発達をいろいろな角度でうながす行為こういであり、年齢ねんれいには関係ないものだから。

エ. 本来の学びとは、体や心を進化、成長させるもので、中学生や高校生のころの学校や受験の勉強と結びつけて考えられる学びとは全く別ものだから。

問3 ——線部③『端緒知』『実践知』『人格知』とありますが、次のうち、「人格知」について説明したものを二つ選び、記号で答えなさい。

- ア. スマホの便利な機能を知り、新しいスキルを身につけること。
- イ. ある国が抱える国際問題を知ることによって自分の進路を見直すこと。
- ウ. 農業のプロと接することで、自然農という方法を知ること。
- エ. 肥料や農薬を使うことがなぜ土の生命力を弱めるのかを考えること。
- オ. 自然農という方法を知ることによって自分の行動が変化すること。

問4 ——線部④「結局学んだことで、自分の生活そのものが変わっていく、というのが三つ目の学び」とあります。では、これに対して筆者の言う「一つ目の学び」は、どのようなことですか。その説明にあたる部分を本文中から三十字以上三十五字以内で二か所探し、その最初と最後の五文字を答えなさい。句読点などの記号も字数にふくみます。

問5 ——線部⑤「そういう考え方」とはどのような考え方のことですか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア. 植物が植物自身の力をそのまま発揮できるようにするために、土地を耕さないほうが良いとする考え方。
- イ. 肥料で栄養を補うことで、同じ広さの土地からなるべく多くの作物を収穫するほうが良いとする考え方。
- ウ. 上手に土地を耕すことで、自然がもともと持っている力を循環させることが大切だとする考え方。
- エ. 作物が農薬から悪影響を受けないように、肥料によって作物に強さを与えておくべきだとする考え方。



問6 —線部⑥「つまらないと感じていた学校の授業も、違ちがった見え方がするかもしれません」とありますが、筆者の考  
えによれば、学校の授業について「違った見え方」ができるためには、どのようにすればよいですか。次の「」  
に合うように四十字以上六十字以内で答えなさい。句読点などの記号も字数にふくみます。

学校の授業で知識を学ぶだけにとどまらず、

「

」

三 次の文章を読んで、後の設問に答えなさい。

小学校四年生の紀子(私)と好恵は合計六人の仲良しグループのメンバーで、グループの誰かが誕生日を迎えるたびに誕生会を開いてきた。好恵から誕生会の誘いがあったため、五人のメンバーはプレゼントを用意して誕生会に臨んだが、好恵の家では誕生会の習慣がないと好恵の母親から告げられ、五人は帰されてしまった。好恵とその母親に対して怒った五人は、今後好恵を自分たちの誕生会からはずすことを決める。

七月八日。七夕の翌日にあたる私の誕生日は日曜日だった。この年も織姫と彦星は逢いびきを果たせず、母は朝から窓辺に垂らしていた笹を片付けると、代わりに折り紙や紙テープで居間を彩った。すでにごちそうの下準備は整えられ、冷蔵庫には子供心をそそる食材がばんばんに詰まっている。中でもひときわ目を引いたのは、『HAPPY BIRTHDAY NARIKO』とホワイトチョコで描かれた手作りのチョコレートケーキだ。食器棚にはお菓子の数々もスタンバイされていて、中には普段あまり食べさせてもらえない体に悪そうなものもある。これがいつもの誕生日なら、私は幸福度一二〇パーセントで宙に浮いていたことだろう。

しかし、私は疲れきっていた。

好恵を誕生会からしめだすことに決めたあの日から三週間、私は人の視線とはこんなにも怖いものかと思うくらい知らされながら過ごした。いつ、好恵に誕生会のことをきかれるのか。いつ、好恵は自分が誕生会に招かれないことを悟るのか。私は絶えずびくびくと好恵の視線ばかりを気にしていたのだ。

好恵に「おはよう」と声をかけられるだけで、私は招待状の催促でもされたように顔を赤くした。会話の途中で沈黙が訪れるたび、「ところで、紀ちゃんのお誕生会だけ……」と切りだされるのではないかとどきまぎした。毎日緊張の連続。七月八日が近づくほどにその緊張は高まっていった。

これほど自分が小心者とは知らなかった。復讐ふくしゅうがこれほどの苦痛くるしみを伴うものとも知らなかった。ついに誕生日を迎えたとその日、だから私は誕生日やプレゼントの喜びより、ようやくその苦痛から解放される喜びのほうが大きかったのだ。

誕生会は滞おとりなく進んで、終わったと思う。もともと滞りなど起こりようもないパーティーだ。まずはケーキの蠟燭ろうそくに火を灯し、部屋を暗くして「ハッピー・バースデー・ツー・ユー」の合唱。それから十の炎を吹き消し、パチパチと拍手。再び部屋に明かりが灯り、みんなからプレゼントをもらって、ようやくごちそう。皿の空いた座卓ざたくにはお菓子が並び、そのあまりは夕方、母がちり紙にくるんでプレゼントのお返しとともに配る。お決まりの儀式ぎしき。この段取りさえ押さえればまず失敗はない。なのに好恵はそれすらもしてもらえなかった。好恵の十歳の誕生日にはケーキもなかったのだ。

みんなの帰った後、急にがらんとした部屋の中で、私は一気に脱力だつりよくした。もらったプレゼントをしまうのも①億劫おつこくで、その場に散らかしたまま二階へ上がると、部屋のベッドにどてつとうつぶした。①甘いケーキの味はどうに忘れ、苦い味ばかりが残っていた。

一生に一度しかない十歳の誕生日。

もう永遠に取り戻せない特別な一日。

好恵はあの日、どんな思いで十代への第一歩を踏みだしたんだろう。

そして今日はどこで何を思い、過ごしていたんだろう。

誕生会の終しゆうりよう了と同時に、私はこの胸のもやもやから解放されるはずだった。なのにもやもやは増す一方で、まふた 瞼の裏に焼きついた好恵の視線はなおも私を苦しめる。ついてない、と心底思った。私の誕生日が七月八日でなかったら、秋や冬の終わりのほうだったら、私は例年通りに何も考えず楽しい一日を過ごしていたはずだ。一年で一番幸せな一日。なのに、好恵の次に生まれたばかりにすべてがだいなしになってしまった。ついてない……。ついてない……。

「紀ちゃん」

と、そのとき、襖ふすまのむこうから姉の声がした。

入るよ、とノックもせずに見れた姉は、ベッドに伏せた私のもとへずかずかと歩みより、黄色いリボンのかかったたんぽぽ文具店の包みを差し出した。

「今、家の前であんたの友達みたいな子に会ってさ。これ、あんたに渡してって」

「え」

「直接渡せばって言ったたら、自転車に乗っていつちやった」

私は声もなくその包みを受けとった。姉が去ってからリボンをほどくと、包装紙にくるまれていたのは須田さん並みに豪華なサンリオ商品のセットだった。私の好きな（注1）リトルツインスターズのメモ帳もある。

「……………」

気がつくと、足が勝手に私を運んでいた。私は階段を駆け下りて玄関をくぐりぬけ、庭先の自転車に飛び乗った。

## ② 自転車は私を好恵の家へ運んだ。

風も、地面も、すべてが私をそこへ運んでいく気がした。

好恵の家はあいかわらず整然と、一寸の乱れもなしに佇んでいた。軒先に縦列された二台の自転車の片方は、ついさっき好恵が停めたものにちがいがなく、私はその几帳面な停めかたに学校における彼女とのギャップを感じながら、自分の自転車を荒っぽく乗りすてた。それから一つ深呼吸をして玄関へむかった。

熟柿のような電球に照らされたブザーに手を伸ばすには、勇気がいった。私は好恵と会うのが気まずいだけでなく、あの日、あんなにもはつきりと私たちを拒んだおばさんに会うことも恐れていたからだ。

どうか鬼母が生まれませんように。

ときどきしながらブザーを押すと、数秒後に「はい」と低い声が出て、扉が開かれた。

「ひび」

現れたのは鬼母だった。

「あ……ら」

エプロン姿のおばさんは、濡れた手をそのポケットのあたりでぬぐいながら、私に困惑の目をむけた。夕食時のせい、扉のむこうからは炒めもののいい匂いが香ってくる。後ずさる私を前に、おばさんはその匂いをたどるようにふりかえり、好恵はどうのとぶつぶつ言いながら奥の部屋へと踵を返した。私のことを憶えていたらしい。

数秒後、重たい足音と共に好恵が現れた。

「どうしたの」

開口一番に問われ、私はたじろいだ。好恵の声には「なんか用？」とでもいうような、白々とした響きがあったからだ。

「あの……その、プレゼントありがとう」

言葉につまった末、いきなり本題に入ると、

「え？ ああ、あれか」

自転車にはまだぬくもりが残っているはずなのに、好恵は遠い昔でもふりかえるようにわざわざ首を傾けた。リアクションの達人にしては鈍すぎる反応。私はますます勢いをそがれて動揺した。すまし顔をあさつての方向へむけている好恵を見ると、自分がここに何を期待して来たのかわからなくなってくる。

③ 苦しい沈黙の末、ひとまずここは撤退だ、と逃げることにした。じゃ、それだけ、と早口で言いながら背をむけ、ドアノブに手をかける。

「夕ごはん……」

と、そのとき、背中からおばさんの声が出た。

「夕ごはん、まだなら食べていきなさい」

最初のうち、私はそれが自分にむけられた言葉とは思えなかった。あのおばさんがこんなことを言うわけがない。しかし、

ふりむくとおばさんは怖こわいくらいにまっすぐに、確かに私を見つめていた。

「……はい」

どうしてか「いいえ」と言えなかった私は、この夜、おばさんや好恵の後について居間へ通され、眉毛まゆげのあまりない(注2)カーリーヘアのお姉さんや、「デブ」「クソ」「バカ」など憶おぼえたての汚きたない言葉を連発する弟と夕食をともにする(2)はめになった。おじさんの姿は見えず、「クソジジイは接待バカゴルフ」と弟がその理由を説明した。

アジフライ。ピーマンとウインナーの炒めもの。かぼちやの煮につけ。ツナサラダ。味噌汁みそじる。

テーブルの上はそれなりににぎやかだったけれど、しかし静かな晩餐ばんさんだった。好恵は学校にいたときの十分の一もしゃべらず、お姉さんは終始ぶすつとしていて、弟一人が悪たれをつき続け、それをおばさんが(3)たしなめる。好恵はなにも無限のエネルギーを持っていてるわけじゃなく、あのサービスピスは精神は学校でのみ發揮されるのだと私は初めて知った。そういう私も緊張で口が強こわばり、「もつと食べて」とうながすおばさんにならず返すのがやっとだったけれど。

おばさんは数分おきに「もつと食べて」とくりかえした。ウインナーを独占どくせんしようとする弟の手をはたいて、小皿に私のぶんを確保してくれました。そのくせ、おかずの量を気にしているのか自分はほとんど箸はしを伸ばそうとしない。

もしかして……。あいかわらず気難しげな顔をして、それでも必死に私を氣遣きづかうおばさん。そしてその様子をじっと見据みすえる好恵の横顔をながめているうちに、(4)私はなぜ今、自分がここにいるのかわかったような気がした。

好恵にとつて一生に一度の十歳の誕生日。あの日、私たちはここへ来なければよかったと後悔こうかいしたけれど、好恵も好恵で私たちを呼ばなければよかったと後悔し、おばさんもまた何らかの悔くいをその胸むねに抱かかえてきたのかもしれない。

そう思った瞬間しゅんかん、あまり馬の合わない友人宅での居心地いこちの悪い夕食会は、何か大事な意味を宿した苦行へと変わった。取り返しのない何かを取り返そうとするように「もつと食べて」を連発するおばさんは、確かに私のどこかを満たし、そしてきつと、好恵のどこかを癒いやしたのだ。

「ごちそうさまでした。おいしかったです」

夜も更けて皿も空になると、私は疲れた様子のおばさんに礼を言い、「もう来んなよ、クソバカ女」と憎まれ口を叩く弟を柱の陰でこづいてから、好恵の家を後にした。いいと言うのに、好恵は途中まで送るとついてきた。

もう一日早ければ織姫と彦星も再会できたにちがいない空の下、街灯に照らされた藪蚊の群れのむこうに無限の瞬きを望みながら、私たちは無言で家への道を歩いた。私は自転車を押しながら。好恵はその後ろからてくてくと。途中、私が「もういいよ」と何度も好恵をふりかえったのは、黙りこんだきりの彼女をおもんばかっていることではなく、自転車で帰ったほうがよほど速いからなのだが、好恵はそのたびに「もうちょつと」と見送りの距離を引き延ばした。

何か言いたげで、なのに言えずにいた好恵がようやくその一言を口にしたのは、そんなやりとりが幾度となく続いた後、「ほんとにもういいから」と私が自転車のサドルに跨ろうとした瞬間だ。

「……つてくれる？」

好恵は私を遮るようにして自転車のハンドルを握りしめ、かすれ声でささやいた。

「え」

「うちのお母さんの料理、おいしかったって、明日、学校でみんなに言ってくれますか？」

⑤ 私たちを包んでいたなまぬるい夜気が、ふいにびしやりと肌を打った気がした。私はとっさに目を伏せ、からから回る自転車のペダルを見下ろした。そして、その回転が止まってからようやく顔を持ちあげた。

好恵は唇を踏んばって私の答えを待っていた。

「うん。言うよ」

それだけ返すのが精一杯だった。

「おばさんの料理、おいしかったって、明日、みんなに言う」

今にも泣きそうなくせに意地でも泣かない好恵の顔が、なんともいえない安堵の表情に変わった。好恵は小さくうなずき、ふうつと息を吐いて、私の自転車から手を放した。それからすばやく回れ右をして、もう用は済んだというふうにてのひら

をぶらぶらやりながら、⑥廊下で男子を追いまわすときのような軽快な駆け足で、深い夜のむこうへと遠ざかっていった。

(森絵都『永遠の出口』より)

(注1) リトルツインスターズⅡキャラクターの名前

(注2) カーリーヘアⅡ全体をカールさせた髪型

問1 —— 線部(1)「億劫で」(2)「はめになった」(3)「たしなめる」の言葉の意味として最も適切なものをそれぞれ一つ選び、

記号で答えなさい。

(1) 億劫で

ア. がっかりして      イ. 気が引けて      ウ. もつたいなくて      エ. 面倒くさくて

(2) はめになった

ア. 予想通りの展開になった      イ. 望ましくない事態になった      ウ. 残念な気持ちになった

エ. 思いがけなく得をした

(3) たしなめる

ア. きつくしがる      イ. あきれて無視する      ウ. 反省することをうながす      エ. ひどく残念がる



問2 ——線部①「甘いケーキの味はとうに忘れ、苦い味ばかりが残っていた」とありますが、ここでの紀子の気持ちの説  
明として最も適切なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア．さつき食べたおいしいケーキの味をどうしても思い出すことができず、逆に、全然美味しくもなかった料理を食べて  
しまったことだけを思い出している。

イ．自分の誕生会の余韻を楽しむことよりも、好恵を仲間はずれにしたままで誕生会をやり終えてしまった後ろ暗さばか  
りが心をしめている。

ウ．楽しかった自分の誕生会の余韻に浸ることができない一方で、罪もない好恵にうそをつき、仲間はずれにしてしまっ  
たことを深く後悔している。

エ．たくさんの祝福の言葉を素直に喜べないだけでなく、友だちを裏切ってしまった自分をどうしても許すことができず、  
自分に対して怒りを覚えてしている。

問3 ——線部②「自転車は私を好恵の家へ運んだ」について、比喩を使わない文に書きあらためなさい。

問4 ——線部③「苦しい沈黙ちんもくの末、ひとまずここは撤退てつたいだ、と逃げるにことにした」とありますが、それはなぜですか。その理由の説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア. 素直に誕生日プレゼントのお礼を言ったにもかかわらず、無関心な態度をされて悲しくなったから。
- イ. 誕生日プレゼントのお礼を言いにはわざとやって来たのに、好恵の予想外の反応に怒りを覚えたから。
- ウ. 好恵に誕生日プレゼントのお礼を伝えに来たが、好恵の予想外の反応に困惑こんわくしてしまったから。
- エ. プレゼントのお礼を言うことで仲直りしたかったのだが、好恵が許つらしてくれず辛つらくなったから。

問5 ——線部④「私はなぜ今、自分がここにいるのかわかったような気がした」とありますが、ここで紀子は、どのような気がしたのでしょうか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア. 自分がここにいるのは、紀子と好恵と好恵の母の三人が、好恵の誕生日から始まったそれぞれの後悔の気持ちから少しでも解放されるためなのではないかという気がした。
- イ. 自分がここにいるのは、家族だけの静かな晩餐ばんさんを少しでもにぎやかにするためであるのと同時に、好恵とのぎくしゃくした関係を修復するためのものではないかという気がした。
- ウ. 自分がここにいるのは、好恵の誕生日の失敗を何とか取りもどそうとしている好恵と好恵の母が、その目的を果たせるかどうかを確認かくにんするためなのではないかという気がした。
- エ. 自分がここにいるのは、苦行ともいえる晩餐に参加して誕生日に押しおかけて好恵の母に迷惑めいわくをかけたことを反省していることをわかってもらうためではないかという気がした。

問6 ——線部⑤「私たちを包んでいたなまぬるい夜気が、ふいにびしやりと肌を打った気がした」とありますが、なぜ私  
はこのような気持ちになったのですか。その理由の説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えな  
さい。

ア. 好恵の母親のことをすぐに許す気にはならなかったにもかかわらず、言うつもりもない言葉を強要されたことで、心  
外にも一方的に非難された気がしたから。

イ. 自分を送っていくという好恵の親切に対し、早く帰りたい一心でそれを断ろうとしたために、好恵を深く傷つけてし  
まったのではないかという不安が頭をよぎったから。

ウ. 自分の母親のことを悪く思われたくないという全く予想外の好恵の気持ちを知り、それに気付けなかった自分の愚か  
しさに気付かされたから。

エ. 学校生活だけではわからなかった好恵の家族思いな素顔を知り、誕生会の件を理由に自分たちの都合だけで好恵を仲  
間はずれにしたことが後悔されたから。

問7 ——線部⑥「廊下で男子を追いまわすときのような軽快な駆け足で、深い夜のむこうへと遠ざかっていった」とあり  
ますが、好恵はなぜこうしたのですか。その理由の説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えな  
さい。

ア. 料理も出せないくらい貧しい生活をしているわけではないのだということがみんなにわかってもらえると考えたから。  
イ. 明日からまた学校で人目を気にせず思いのままにふるまうことができると思ったから。

ウ. 自分がいつもはおいしい料理を母親に作ってもらっているということがみんなにわかってもらえると考えたから。

エ. 他の家の母親と同様に娘の友人を料理でもてなす普通の母親だということがみんなにわかってもらえると考えたから。

